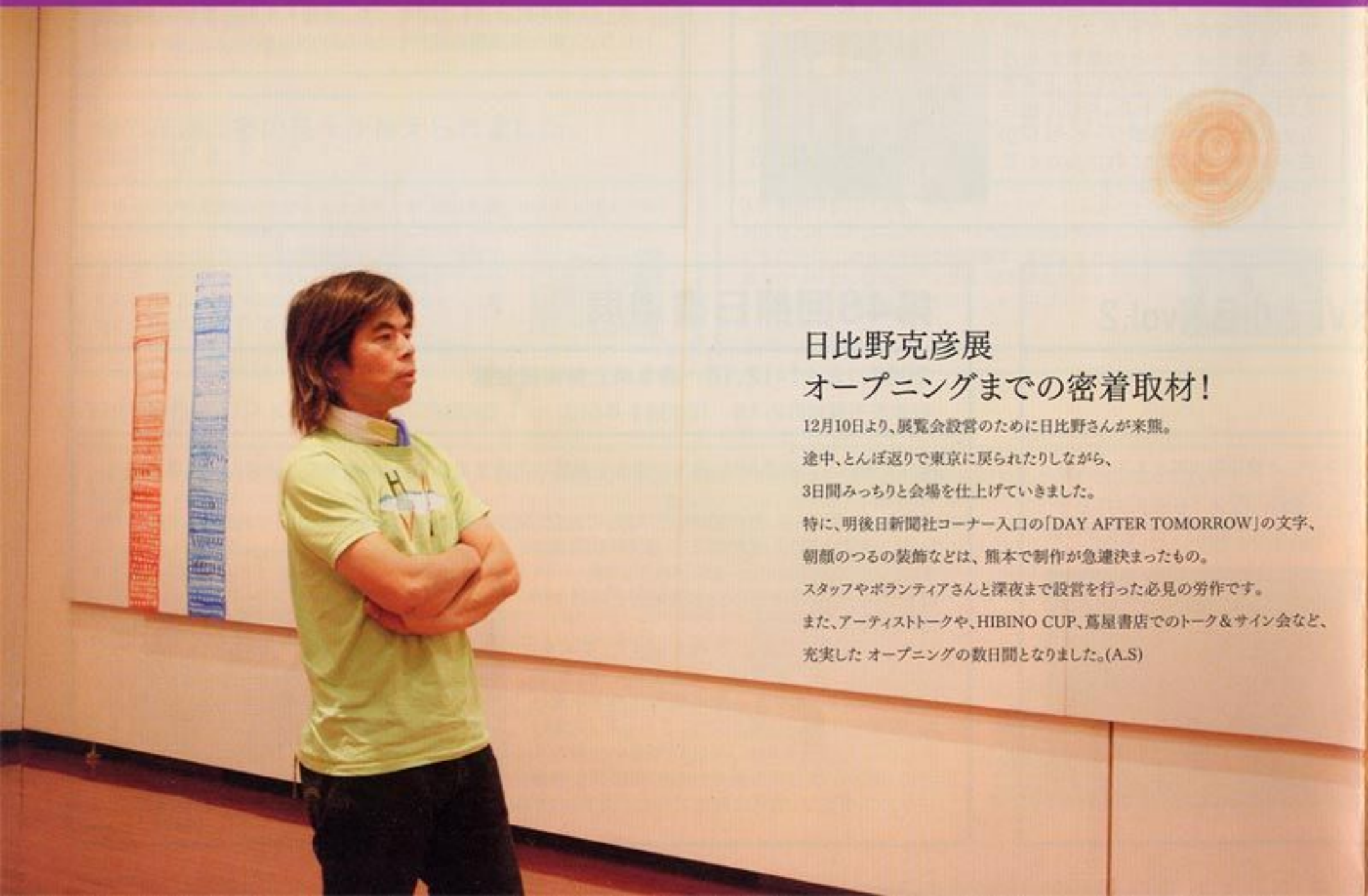


ART KISS LEITER

FOR KUMAMOTO ART PEOPLE Contemporary Art Museum, Kumamoto

熊本市現代美術館発行 <http://www.camk.or.jp> [2008.春号] **vol.36**



日比野克彦展 オープニングまでの密着取材!

12月10日より、展覧会設営のために日比野さんが来熊。

途中、とんぼ返りで東京に戻られたりしながら、

3日間みっちり会場を仕上げていきました。

特に、明後日新聞社コーナー入口の「DAY AFTER TOMORROW」の文字、
朝顔のつるの装飾などは、熊本で制作が急遽決まったもの。

スタッフやボランティアさんと深夜まで設営を行った必見の労作です。

また、アーティストトークや、HIBINO CUP、葦屋書店でのトーク&サイン会など、
充実したオープニングの数日間となりました。(A.S)

Museum information

明後日朝顔プロジェクト2007熊本収穫祭 2007.10.30-11.30

春からHIGO BY HIBINO日比野克彦展のイベントとして始まった明後日朝顔プロジェクトは、熊本市内の5箇所(城東小学校、上通、下通、新市街、当館)で実施されました。日も短くなった秋、各地で朝顔の種の収穫祭が行われました。

城東小学校のプールを囲むフェンスになった種は、弾け飛ぶ前に保護者等の手によって数回採種されていましたが、10月30日には、終幕として日比野さんを講師に迎え、種についてのお話と、種を入れる船の工作をするワークショップ、そしてその船に種を収める収穫祭が行われました。子供等は、思い思いの船を作りうれしそうに種を収穫していました。

同日、下通では、参加していた計18店舗が、メッセージの書かれた種入りの包みを日比野さんに渡しました。年貢種を納めるようにして、この日終了を迎えました。

上通の朝顔は、お洒落なブティックやカフェのお客さんの視線を浴びて、緊張しながらも育っていたようですが、枯れるのも早かった為に、一番に収穫祭を行いました。

朝顔カーテンをつくり、緑の安らぎを与えていた美術館の朝顔は、正面玄関に発生した光化学スモッグにより一時病気になるりましたが、安全地帯へ避難した後は回復し、たくさんの種をつけました。遅咲きの花にはまだ青い種が残っていましたが、採種後に乾燥させることとし、惜しまれての撤去となりました。

そして11月30日、熊本最後の朝顔収穫祭を新市街で行いました。夜間照明に悩まされていた新市街の朝顔のために、後半は夜間照明を遮る為に簾をかけて夜を作りました。そのおかげで、遅咲きですが花をつけ、その花からなった貴重な種を採種。

まだ、種が乾燥していなかったため、ビルの裏の非常階段に種を運び、乾燥させることにしました。

この収穫された全ての種と、全国10地域で育った多くの種とが、明後日朝顔プロジェクト2007熊本の集大成として展覧会HIGO BY HIBINOに集結します。約7ヵ月、朝顔と向き合ってきた、このプロジェクトが作り出す人と人や地域の結びつきのおかげで、美術館も何か一つ成長したような気がします。種は船のようだとされる日比野さんと朝顔の種が、出会うべく所に運んでくれたように感じました。

2007年は全国で展開された明後日朝顔プロジェクトですが、今後の動きが楽しみです。(M.H)



城東小学校



下通



新市街



城東小学校



上通



CAMKの種

第19回熊本市市民美術展 熊本アートパレード開催 菊畑茂久馬講演会 & JGビッグバンド ジャズライブ開催

第19回熊本市市民美術展熊本アートパレードを開催しました。(2007年11月3日~18日)熊本城築城400年を迎えた今回は「ときをこえて」をテーマに作品を募集、のべ324点の力作が出品されました。開催前日には入賞された方々の表彰式が和やかな雰囲気の中で行われ、審査員の菊畑茂久馬さんも出席されました。

11月4日にJGビッグバンドによる「音楽の秋、Swingの秋 JGビッグバンド ジャズライブ」を開催。結成から30年以上、熊本市内を中心に活躍されている社会人ビッグバンド、JGビッグバンドの皆さんの、金管楽器の爽やかな音色が美術館内に響き渡り、熊本アートパレードは一気に盛り上がりました。

また、11月11日には熊本アートパレードの審査員を務めて下さった菊畑茂久馬さんの講演会、モク菊畑茂久馬さんのモクモクトーク「反芸術、〈天河〉へ、そして幸人のこと」を開催。全国でも珍しいアンデパンダン形式(すべての作品を無審査で展示する)を取り入れたこの熊本アートパレードに、菊畑さんは「アンデパンダン方式の美術展はたくさんの豊穡を生み出す。たとえジャンルは違っても根っこはみんな一緒。これからもどんどん続けていきましょう。」と温かいエールを送って下さいました。(N.I)



CAMK秋のピアノコンサートvol.4 2007.10.28

すっかりCAMKの恒例イベントになった、ピアノボランティアさんによる「CAMK秋のピアノコンサート」が開催されました。回を追うごとにピアノボランティアさんのレベルが上がり、切磋琢磨のよい機会になっていることを実感。毎晩開催している「ホームギャラリーコンサート」とはひと味違うコンサートになりました。(E.Z)



ART de Gyan!

[アート・ド・ギャン]
熊本県で「アート、どう?」の展です。

池坊熊本東支部 いけばな池坊展

2008.1.29-2.3 くまもと阪神8階催場
熊本市桜町3-22 TEL322-1111

池坊熊本支部創立40周年を記念して、池坊熊本東支部いけばな池坊展が開催。子どもたちへいけばなの楽しさを伝えることに力を注いでいる熊本支部ならではの学校華道や、伝統文化子ども教室の作品も展示され、あたたかい雰囲気漂う会場構成となっていた。冷え込みの厳しい外の空気とは違い、色とりどりの花々に囲まれて春を先取りしたような気分になった。(E.Z)



「look and feel 4 デザインの展開図」展

2008.1.22-2.1 崇城大学ギャラリー
熊本市花畑町10-25 TEL323-1158

「デザインの展開図」というテーマの下、デザインが生み出されるまでのプロセスをも展示に組んだユニークな展覧会。崇城大学芸術学部デザイン学科クロスメディアデザインコース、森野ゼミ生による8点は、映像・CG、インスタレーション、書体、本等メディアは様々だが、各視点から「現代社会」と向き合い、膨大な量の時間、仕事、思考をも会場で表現した点において共通している。文字、言葉やコミュニケーションについて取上げる作品が多数だった中で、佐田美香は、匂いの形容表現を集め〈舌〉〈目〉〈心〉など六章からなる「匂本」を制作。眺めているだけで体が弛緩するような不思議な感覚とともに、言葉の喚起力に改めて気づかせてくれる一点であった。(A.O)



二人展(油絵)

2007.11.28-12.9 カフェサロン六花
熊本市水道町4-1アートビル2F TEL352-6114

正木憲之さんと工藤勇二さんの二人展。板井榮雄さんの絵画教室に通うお二人の展覧会。教室は月に2回。教室に通い始めて、正木さんは18年、工藤さんは2年になる。工藤さんは、先生の影響を受け、以前から描いていた穏やかで落ち着いた色彩の風景画から大胆な構図と色彩へと画風の変化が生まれた。正木さんの作品の中には、横たわる裸婦を雲に見立てて浮かべた斬新な構図もあった。正木さんと工藤さんという質感の違う、異色な組み合わせの展覧会、これからは教室に通う生徒さんたちとの展覧会をどんどん開催していきたいと正木さんは意欲的に語られた。仲間の皆さんとのどんなコラボレーションが生み出されるのかこれからがとても楽しみである。(N.I)



長野良一 「あそ写絵展～布でつづる阿蘇」

2008.1.29-2.3 熊本県伝統工芸館
熊本市千葉城町3-35 TEL324-4930

写真家の長野良一さんの写真による、阿蘇の雄大な自然や可憐な草花を布に染めた作品展。ハンカチ、スカーフ、タペストリーなど、薄い布を使った軽やかでさわやかな空間が演出され、写真の楽しみ方を広げるものであった。今後も主題と素材の組み合わせなど、新たな展開を期待したい。(Y.H)

FUJITA Hirobumi NODA Ryutarō SERVEと小品展vol.2

2008.1.16-2.24 ギャラリー楓
熊本市神水1-14-23 TEL382-8320

当館で2006年に開催した「アルス・クマモト」展にも参加頂いた藤田ひろぶみさんと野田竜太郎さんの二人展。今回は、銅版画を中心に、藤田さんの作品16点、野田さんの作品6点が展示されている。ギャラリーに足を踏み入れると、まず目に入るのが、野田さんの水墨画《抑えられた衝動》である。「アルス・クマモト」展では不穏な何かを孕みながらも、それに耐える人物が描かれていたが、この《抑えられた衝動》では、それが一気に慟哭のような叫びとなって噴出している。エッチングや竹ペンで表された他の作品についてもそうだが、今回の野田さんの作品は、人が生きていくなかで直面する様々な不条理を、人間の最も原始的で根源的な行為である叫びで見事に捉えている。一方の藤田さんは、《サビコの女の路奪》や《オダリスク》など過去の巨匠の作品からインスピレーションを得た作品を、《熊本城》シリーズと共に展示しているが、両者に共通するのは、先人が築いた偉大なものを藤田さんが現代の目で解釈し、新たな作品として昇華していることだろう。《熊本城》シリーズでは、石垣や瓦が一つ一つ緻密に描かれ、さらなる技術の向上が窺える。両者の作品群の延長線上としてある《Melody》は、藤田さんのこれまでの記憶や心象風景と、現実の世界が交錯した詩情に満ちた作品に仕上がっている。(A.A)



第48回熊日書道展

2007.12.11-12.16 熊本県立美術館分館
熊本市千葉城町2-18 TEL351-8411

熊日主催のこの書道展は、県下で最大で最高の書道展であり、県内の書家が研さんの成果を競う場となっている。今回は、漢字、かな、近代詩文、少字数、てん刻、刻字の6部門に509点の出品があった。その中から211点の入賞・入選がきまり、委嘱・無鑑査作家の72点の計283点が展示されていた。審査員は、日展評議員の鈴木春朝氏と同理事の池田桂鳳氏であった。グランプリの熊日賞は、大橋永佳さん(玉名市)の「秋二題」。県賞は小柳貞松さん(熊本市)の近代詩文「坊ちゃん」。熊本市賞は杉本京霞さん(熊本市)の漢字「過大梁作」であった。会場は各部門とも多彩であり、漢詩や和歌の古典を中心に、端正な漢字や流麗なかなで格調高く表現した力作が並び、活気に満ちていた。(S.K)





アーティストがみずから作品(当館収蔵作品)にコメントをよせるコーナー「レター・フロム・アーティスト」。あわせてアーティストの最新情報をお届けします。

Letters from Artists

◎第9回/吉野辰海(よしの・たつみ)さん (from 日本)

1940年宮城県生まれ。ネオ・ダダに参加。近年、ほぼ毎年企画展やグループ展にて作品を発表し、その世界の展開をあきらかにしている。

Q1《大首》についてお聞かせください。

《大首》については、その出来上る迄の経過を話した方がいいかも知れません。

1970年代に平面展開していた要素を、単純な形象の元素と閉じ込めて、それらが四散発散する役割の器(パッケージ)として犬が出て来ます。なぜ犬の器かという、中にとじ込めた時代背景、私の友人・保護者的な役割の犬がいたので、彼にその役割を荷(にな)ってもらうことにしたのです。それで出来たのが《投影装置の犬》です。

第2次大戦終結後の日本の美術状況、いわゆる現代美術といわれるせまい場においては、ヨーロッパ・アメリカ美術の流れに乗ったかたちで動いていたと思います。貧しい日本の消費生活の中に文章としてポップ・アートが出現するなどという少し変な状況が出てきたりしました。私はなんとなく60年代後半あたりから少々の違和感を味わいながら、なんとなく自分なりの表現をと何やらやってきました。一個人の消せないような記憶なり、視覚に焼きついているものなり、あるいは何をいえばいいか、1人の人間を形成している「感覚」「物象」を純化すれば、普遍化出来るんじゃないかと思ひ、自分の中身を掘りおこして、探して行って、大変つつまじやかではあるが、ある象徴の風景を犬のお腹の中に作ったというのが《投影装置の犬》です。ファイバースコープで中を見るような仕掛けになってます。

2、3年して、このつつまじやかな風景の要素がエーテルとなって膨張し、犬がゴム風船よろしく立ち上がった。

私の表現の原初から興味があった、時間・運動が、振(ねじ)れの運動となって現れる。犬の鼻が自動的に振れてきた時は笑っちゃいました。振れた犬はいろいろな表情の運動を見せ始める。「スクリュウ」シリーズや、振れの回転で得られる生と死。再生の力が雄犬で表される犬に女性性を与えられる。再生産する女性性から生命の水「アクアドッグ」シリーズなどと発展します。

そこで《大首》ですが、首だけの表現はスクリュードッグシリーズの初めから登場します。1990年の初めに大きめの会場で個展する機会に恵まれ、大きな振れ首が登場します。哺

乳動物は顔面の表情に意味を見出すのが特性となっています。第2作目が熊本市現代美術館のコレクションの作品です。この首は大きな表情をしていません。むしろ唯見ているだけのような首です。私達人間に近い動物は、ただ生命体の形を見るという認識を示すだろうと思います。

Q2最近興味のあること、作品の今後の展開について教えてください。

このところ制作している作品は、視覚的なものを頭(大脳皮質)で考えるというより、「見」て、「感」じる、という方向に作り手として行きたいと思っています。視覚が交感神経と交感するなど、いいながらです。

Q3今後予定している展覧会など、作品をみることができる場所がありますか？

九州方面では、福岡県朝倉市に黒川INN美術館(私立)というのがあります。そこに前記の第1号の《大首》があります。大分市美術館に《十字行》(高さ4.54m)、山口県宇部市にこれは一番大きな《大首》(高さ4m)が野外に設置されています。



《大首》1992年 高さ198.0cm FRP、熊本市現代美術館蔵

Visitor's Letter

来館者のみなさんからのメッセージアンケートに寄せられた感想(抜粋)を紹介いたします。

◇アートバレード

・作風の似た作品をまとめて展示してあったので、とても見やすかったです。展示室内のレイアウトも毎回毎回変わるのには驚かされます。おかげで毎回新鮮な気持ちで作品を見ることが出来ます。(34歳、男性、熊本市内)

・ごたごたしていなくて静かでとても気持ち良く観ることが出来、至福の時をすごせました。ありがとうございます。孫(小4)を連れてくるのは2度目ですが卓球をするのが楽しみのようです。(64歳、女性、熊本市内)

◇熊本の華人展

・アトムカーはふつうの道路で走れるのかなと思いました。できたら、私もアトムカーを作りたいです。(9歳、女性、熊本市内)

◇日比野克彦 HIGO BY HIBINO展

・日比野さんの伝統工芸とのコラボが興味深く、またその作り手の方の言葉や作業の様子がうかがえて、更に地元に対する興味も湧く。面白い企画だと思う。(31歳、女性、不明)

・ただの展覧会ではなく、地域の個性を活かしているところが今までにない。よかった。せっかくおもしろい試みをしているのに、お客さんが少ないのが気になった。集客もがんばってください。(32歳、女性、熊本市内)

◇CAMKへのご感想

・姉に連れられて初めて来ましたが、目と心で楽しませていただきました。今後通おうかなと思います。(18歳、女性、熊本市内)

・本がゆっくり読めて良かった。(52歳、男性、熊本県)

・館内はとても落ち着きます。いつもホッとできる空間です。(45歳、女性、熊本市内)

ooh-vanguard!

大番外

当館学芸員が心動かされた芸術・文化の動向について語りあうコーナー、「大番外」。

第7回 本田代志子
ロンドンの現代美術
2007年秋の展覧会より

2007年9月から11月まで、文化庁による平成19年度新進芸術家海外研修生として、ロンドンにてフェミニズム・アートを中心とする現代美術の調査をおこなった。現地では、フェミニズム・アートの雑誌[n.paradoxal]の発行人で、チェルシー芸術大学で教鞭をとるケイティ・ディー・ブウェル氏が、かつて熊本市現代美術館のインターナショナル・アドバイザーをつとめていたこともあり、助言をいただきながら情報を収集した。その期間中の2007年の9月から11月にロンドンで開催され、話題となった現代美術の展覧会を紹介したい。

サーペンタイン・ギャラリー・パビリオン
オラファー・エリアソン 2007.8.24-11.4

サーペンタイン・ギャラリーは、入場無料で近現代美術を紹介する美術館で、マシュー・バーニーの「拘束のドロウイング」展を開催中で盛況であった。今年の夏限定のパビリオンのデザインは、現代美術家オラファー・エリアソンとノルウェー人建築家チェーティル・トーセンによる。らせん状のテラスを周りながら上へ行くと、公園を広く見渡すことのできる展望台ともなり、開放感にあふれていた。そのスロープの開口部には上下に糸が張られ、移動とともに柔らかく変化する光の表情をとらえることができる繊細さを備えていた。内部は階段状のベンチ、自然の太陽のような光源を設置したカフェで、レクチャーの会場としても使用されていた。パビリオンと公園、スロープとカフェといった内部と外部の緩やかな境界線や、スロープ周囲の糸の張り方によって生み出される視覚的多様性など、エリアソンらしく私たちが自然にふるまう行動のなかで、小さな喜びを発見できる可能性に富んだ空間であった。



テート・モダン タービンホール
ドリス・サルセド 《Shibboleth》 2007.10.9-2008.4.6

昨秋の一番の話題となったのは、コロンビアの作家ドリス・サルセドの《Shibboleth》である。美術館入口のタービンホールと呼ばれる吹き抜けのスペースの既存のコンクリートの床に亀裂をいれた作品である。入ってすぐの壁際の小さなひび割れ状の線から始まり、176メートルあるスペースの奥に行くにしたがって、亀裂は広がり、深さも増していき、その断面には鉄のフェンスが埋め込まれている。この作品タイトルのShibbolethには、特定の社会集団や階層内で使われている慣習や合言葉という意味があり、サルセドは、人種差別や植民地主義など、社会のなかのさまざまな隔たりをテーマにしている。

この作品が公開されて間もなく、現実の溝であるとは思わずに落ちた人がいたこともあって、メディアでも話題となっていたが、何よりも、この作品の力強いメッセージ、そのスケールの大きさは比類なきものである。年間入場者500万人の美術館に半年展示されることによって、多くの観客が、身体的体験によって、「社会の溝」を再考することは意義深いことである。この作品は2008年4月まで公開され、その後コンクリートを埋めなおす予定であり、溝の痕跡はいつまでも消えることがないだろう。



テート・モダン 「ルイズ・ブルジョワ」 2007.10.10-2008.1.20

初期のドロウイング、絵画から、ゴム、ブロンズ、大理石、近年の布を使った作品までを広く紹介する回顧展。テート・モダンの2000年のオープン時、ブルジョワの大型の蜘蛛の作品《Maman》がタービンホールに設置されたが、今回は美術館のテムズ川河畔側に展示された。出品作には、作家のアトリエでの思考のプロセスを再現するかのようなエネルギーで魅力的な小品から、さまざまな素材による洗練されたフォルムのもので、多様性に富んでいた。

この展覧会にあわせて、10月27日に開催された講演・シンポジウムに参加した。講演はフェミニズム的な視点による研究を主としており、美術史家のリンダ・ノックリンほか、テート・モダンのキュレーター・フランシス・モリス、ロンドン大学のミニョン・ニクソン、精神分析学者ジュリエット・ミッチェルら作品解釈のさまざまな可能性が呈示された。なかでも、ノックリンがブルジョワの夫に大学で教えを受けた思い出や、出品作品のモチーフとなっている建物の個人的な記憶を語っていたことが、95歳のブルジョワを同時代人として強く実感することになった。

テート・ブリテン

毎年秋に恒例の「ターナー賞」(1984年よりイギリス在住で重要な活動をした50歳以下の現代美術作家に対して授与される)が今年初めて、テート・リバプールが会場となり、ロンドンではこの30年余りの歩みを振り返る展覧会が開催された。これまでにノミネートされ、受賞した作家、作品はどれも興味深いものではあったが、その作家の代表作ではないため、「ターナー賞回顧展」(2007.10.19-2008.1.13)は全体的に印象が薄いものであった。なお、この展覧会は2008年に森美術館で開催予定である。

美術館で同時期に開催されていた、19世紀後半にラファエロ前派の一人として活躍した画家の「ジョン・エヴァレット・ミレイ展」(2007.9.26-2008.1.13)は、美術館収蔵品の堅実な研究成果が形となった展覧会であった。本展も今年、北九州と東京で開催予定である。

今回のロンドン調査では、さまざまな場面においてアートの世界の広さを実感した。テート・ブリテン、テート・モダン、大英博物館等の常設コレクションは入場無料であるが、3ポンド程度の寄付が求められている。企画展は10~15ポンド(約2500~3700円、通常ミニ・リーフレット付)である。美術館主催のシンポジウム、レクチャーは20ポンド(約5000円、コーヒー一杯付)、事前予約制で、定員100-200人であるが、多くの場合は完売し、当日では参加できないことも度々あり、アート人口の多さに驚いた。

また、展覧会、イベント等には多くの企業が協賛をしており、アートを支える環境が充実している。そのため、多様な催し物があり、活気的で魅力的な場所と広く認められているといえよう。

また約300あるといわれている商業ギャラリーがある。中堅のギャラリーでは国際的なアーティスト、小規模のギャラリーでは若手の作家を紹介しており、ロンドンの美術系大学の卒業生が大半を占めている印象を受けた。ギャラリーの規模や方針、作家選定に幅があり、世界の作家を、個人コレクターや美術館向けに紹介、販売といった、アート市場の大きさと多様性を実感することになった。このように、ロンドンの美術を取り巻く環境では、多くの美術系大学、作家、ギャラリー、コレクター、美術館、そして観客といったアートに関わる人口が圧倒的に多い。美術に触れる機会を提供する側の者としては、多岐にわたる展覧会、プログラムを提供し、幅広い世代が、アート鑑賞、美術文化事業支援など、多様な関わりをもちながら、歩んでいけるような環境づくりへと、地道に継続的に活動をつづけていかなければならないと感じた滞在であった。

● 年も明けて、熊本が一番寒い季節もすぎ、春はもうすぐですね。今回の号は、熊本アートバレードから華人展、日比野克彦展オープンまでと盛りだくさんの報告となりました。今年度のAKL(33号~)は、毎号日比野さんに関するイベントや記事を掲載してきましたので、バックナンバーを振り返ると、展覧会開催までの大きな流れが浮かび上がってくるようです。ぜひみなさん、HP等でチェックしてみてくださいね。本年も、AKLをどうぞよろしくお願いいたします。 編集長 富澤治子

●執筆一覧 *ギャラリー取材原稿の文面にイニシャルにて載せております。

兼城島山
Syozan Kaneshiro (書道家)
青山法草
Tanso Moriyama (書道家)
本田代志子
Yoshiko Honda (熊本県現代美術館主任学芸員)
藤原江美
Emi Zoza (熊本県現代美術館学芸員)
富澤治子
Haruko Tomisawa (熊本県現代美術館学芸員)

坂本諭子
Akiko Sakamoto (熊本県現代美術館学芸員)
高田彩葉
Aki Ashida (熊本県現代美術館学芸員)
竹田 啓
Akane Takeda (熊本県現代美術館学芸員アシスタント)
伊豆菜々
Nana Izu (熊本県現代美術館学芸員アシスタント)
矢加部 咲
Saki Yakabe (熊本県現代美術館学芸員アシスタント)

小山明日香
Asuka Oyama (熊本県現代美術館学芸員アシスタント)
山田千明
Chiaki Yamada (熊本県現代美術館事務局長)
眞原賢一郎
Kenichiro Mahara (熊本県現代美術館主事)
橋本真紀子
Makiko Hashimoto (熊本県現代美術館主事)

●発行元/ART KISS LETTER アート・キッス・レター Vol.36
2008年3月発行(春号) ◎無料◎
●発行人/南 宏 編集長/富澤 治子 ●印刷/コロニー印刷
●デザイン/(有)松永 社デザイン事務所
●発行/熊本県現代美術館 〒860-0845 熊本市上通2-3
TEL.096-278-7500 FAX.096-359-7892